The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	死別による人格的発達と自然観の関連
Author(s)	末松, 弥歩
Citation	生老病死の行動科学. 2008, 13, p. 15-23
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/9731
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

原著論文

死別による人格的発達と自然観の関連

The relationship between personality development after bereavement and view of nature

（大阪大学大学院人間科学研究所博士前期課程）末　松　弥　歩

Abstract

Watanabe & Okamoto (2005) has revealed that personality development occurs after bereavement (PDAB). However, the relationship between PDAB and attitude toward the nature has not been clarified. The aims of this study were 1) to examine the validation of the brief scale for PDAB, 2) to develop the scale for the attitude toward the nature (SATN) and 3) to explore the influence of attitude toward the nature on personality development. Questionnaire survey was conducted to 99 adults (M = 46.7 yrs) who experienced loss, SATN was newly developed into 5-item scale. Moreover, the validity and reliability of PDAB were confirmed. Additionally, according to the results of hierarchical multiple regression, it was clarified that SATN effects only on "extended self-sensation" of PDAB.

Key word: bereavement, personality development, view of nature, stress related growth

Ⅰ　はじめに

1．死別による人格的発達

現代にはストレスとなる事柄が様々存在するが、特に最もストレスフルとされるのが死別体験である。死別体験とは、他者の死を経験することであり、死を受け入れることで自分自身の死を経験的に知ることである（Landsberg, 1973）。この悲嘆克服には困難が生じ、心身医学では、ネガティブな精神状態の持続と身体的疾患との間の関連が指摘されており、心理的にも身体的にも死別体験の克服は残された遺族にとって重要な問題と言える。しかし、近年、ストレス関連成長（stress related growth）という現象が注目され、ストレス経験におけるポジティブな側面に注目する研究がある。Deeken（1983）は、「苦痛に満ちた悲観プロセスを経て、人は新たなアイデンティティを獲得し、より熟練した新しい人間として生まれ変わる」とし、喪失体験と悲嘆を肯定的に受け止めることの重要性と、それによる人格的な成長を示した。東村・坂口・柏木・恒藤（2001）はこれらのポジティブな変化を、①ライフスタイルの変化、②死への態度の変化、③人間関係の再確認、④生への感謝、⑤自己の成長、⑥人生哲学の獲得、⑦宗教観の変化の７観点から、また渡邉・岡本（2005）は①自己感覚の拡大、②死への恐怖の克服、③死への関心・意味の見出しの３観点から具体的に明らかにしている。

しかしながら、東村ら（2001）の研究では、ホスピスの患者の遺族という個別性の高い死別経験者を対象としているため、死別による人格的発達が死因や見取りを特定しない本研究の趣旨とは合わない。そのため、故人の死亡場所、死因などを特定しない渡邉・岡本（2005）

の死別経験による人格的発達尺度を用い、調査を行うこととした。しかし、この尺度は「生と死」に関心を持つ、比較的年齢の高い対象者に限って調査を行い尺度作成をしているため、その信頼性、妥当性が疑わしいこと、加えて第一因子の質問項目数が他の二因子より多く、質問項目の内容が類似しており、尺度として使いづらいことなど疑問点がある。以上より、渡邉・岡本（2005）の死別経験による人格的発達測定尺度の因子間の質問項目数を使用しやすいよう調整し、その信頼性と妥当性の検討を試みることを本研究の目的とした。また、本研究では、先行研究である渡邉・岡本（2005）に従い、死別による人格的発達を「身近な他者との死別を契機として、自己の洞察を深めるという心理的プロセスにおけるポジティブな変化」と定義する。

2. 日本人の自然観

近代においては、世の中は現世思考的な動きを見せ、死生観もそれに伴い徐々に変化してきている。現代の日本人の信仰的特長としては無信仰、多信仰であることが証明されており（NHK 放送文化研究，2000，2005；総務省統計局・統計研究所，2007）、日本人の信仰性はかなり希薄化していると考えられる。しかしながら、身近な他者との死別をきっかけに信仰に触れることにより、その考えに変化が現れることも示唆されている。例えば、Deeken（1990）は物事がうまく進んでいる間は、その意義に関心をもつ人は少ないように感じるが、生活の基盤が崩れたり、人生の有限性に気づかされたとき、改めて自分の価値観や宗教の意義について真剣に考え始めるとしている。

しかし、日本人は、臨死に際して、必ずしも無宗教な心理状態や、仏教やキリスト教的な死生観のみに基づく心理状態ではないことが示唆されており、日本人的な死生観の把握の必要性が指摘されている（清藤・板橋・岡部，2002；丹下，2004）。筆者はその日本人的な死生観とは、日本人の民族宗教性とも言われる自然観ではないかと考える。日本人は、農耕民族であり、古くから自然との一体感が強く、人もまたその一部であるという気持ちを強く持っていた。そして、自然の一部として、自然の中で、自然と共に行き、死んでいくことが昔の日本人の生活であった。現在でも庭園、歌、祭事や祈祷のような、自然や動物との共生、自然観、無常観が盛り込まれたものは数多く存在し、それには日本人の自然に対する考え方が現れている。このような自然と一体化する生活を好む日本人の死生観は、自然から生を受け、死後に自然へと帰るものとして、自然のふところに抱かれると考える傾向がある。自然観と死生観との関連に関しては、尾﨑・平井・恒藤・藤田（2005）の調査でも指摘されており、死生観の項目を含む死別による人格的発達に関しても同様に自然観と関連があるのではないかと考えられている。自然観得点の高い人は上記のように自然に対する感謝やありがたみを知り、その尊さや生命の大切さを感じやすい傾向にあると考えられる。日頃から自然に対して関心があり、意識の高い人は人間の死に直面した際に、関心や意識の低い人に比べより成長が促されるのではないかと考えられる。本研究では、自然観が死別による人格的発達に及ぼす影響も検討した。

しかし、自然観を実証的に調査した文献は少なく、また、尺度に関しても尾﨑ら（2005）の自然観尺度があるが、哲学的、論理的で、表現が難解であり、身近な生活に関連した自然観を問う質問項目ではない。また、筆者の知る限り、自然を主体の身近に感じる存在として捉える本研究の自然観を網羅する尺度は見当たらない。そこで本研究では、自然観を「日常

の身近な自然に対する個人の態度や理解」と定義し、身近な自然観を測定する自然観尺度を作成することも加えて目的とした。

Ⅱ　目　的

本研究の目的は、(1) 死別による人格的発達に注目し、既存の死別による人格的発達測定尺度の簡易版を作成し、信頼性・妥当性を検討することである。そして、(2) 死別による人格的発達を促すのではないかと考えられる自然観を測定する尺度作成し、(3) 死別による人格的発達への影響について検討することを目的とした。

Ⅲ　方　法

1　対象者

2007 年 7 月、A 大学生とその家族、または筆者の知人を通じ質問紙調査を行った。調査対象者 170 名中、過去に死別を経験している者は、127 名（74.7%）であった。このうち回答に不備のあった 28 名を除く、男性 34 名女性 65 名から成る、計 99 名（平均年齢 46.72 歳 , SD = 15.68）を分析対象とした。

2　調査内容

(1)　死別に関する属性

性別、年齢、職業、家族構成、今まで死別を経験した故人との続柄、死別時の故人と回答者の年齢、故人との死別のつらさ（5 件法）、最も重い死別を経験した故人との続柄について回答を求めた。

(2)　死別経験による人格的発達

渡邉・岡本（2005）により作成された、死別による人格的発達測定尺度を使用した。この尺度は、死別を通じ起こる自己の心理的プロセスを測る尺度であり、3 因子から成る。3 因子は、自己を受容した上で、他者、社会へと視点を移すという範囲の広がりを表す「自己感覚の拡大」(20 項目)、死に対する恐怖の減少を表す「死への恐怖の克服」(5 項目)、死について考える項目と、死が人生に肯定的な作用をもつ項目から成る「死への関心・死の意味」(7 項目）である。ただし、この尺度は、「自己感覚の拡大」因子において項目数の多さ、質問項目の類似などから尺度として使いづらいため、本研究では渡邉・岡本（2005）の死別による人格的発達項目の因子分析結果より、それぞれの因子の因子負荷量の高い上位 4 項目、計 12 項目を用いた。なお、回答は、「最も重い喪失体験を経験する前と、経験した後の考えの変化を念頭におき、質問にお答えください」という教示のもと、「1. 全くそう思わない」「2. あまりそう思わない」「3. どちらでもない」「4. ややそう思う」「5. 非常にそう思う」の 5 件法で評定を求めた。その際、渡邉・岡本（2005）の死別経験による人格的発達質問項目は、回答者に分かりやすいよう、一部表現を変更して使用した。

(3) 自然観

本研究では自然観を「日常の身近な自然に対する個人の態度や理解」と定義した。そこで、上記の自然観の定義を包括し、かつ一般に使用できるような質問項目を、尾﨑ら（2005）の自然観尺度を参考に、5 項目を作成した。回答は、「1. 全くそう思わない」「2. あまりそう思わない」「3. どちらでもない」「4. ややそう思う」「5. 非常にそう思う」の 5 件法で評定を求めた。

Ⅳ　結　果

1　死別経験による人格的発達測定尺度の再検討

渡邉・岡本（2005）の死別による人格的発達項目の因子分析結果より、それぞれの因子の因子負荷量の高い上位 4 項目を用いた簡易版を作成した。そこで、本研究では、まず、因子を 3 に指定して因子分析を行った（最尤法 , 斜交回転；プロマックス法）。その結果、先行研究と同様に 3 因子が妥当であると判断された（Table 1）。また、各因子の α 係数はそれぞれ、因子Ⅰが .85、因子Ⅱが .77、因子Ⅲが .71 であり、因子間相関は Table 3 に示した。つまり、第Ⅰ因子はかなり内部一貫性の高い項目で構成されており、また第Ⅱ、第Ⅲ因子も α 係数の値はやや低いが、比較的安定していることが窺える。このことから、死別経験による人格的発達測定尺度簡易版の信頼性と、因子的妥当性が証明された。また、因子名は先行研究より、因子Ⅰは「死への恐怖の克服」、因子Ⅱ「死への関心・死の意味」、因子Ⅲは「自己感覚の増大」と命名した。これらの因子の合計得点の高さは、第一因子は死の恐怖が少なく、より克服へ向かっている、あるいは克服していることを、第二因子は、死に対して関心を持ち、その意味をより理解していることを、第三因子は自己の洞察が深まり、自己感覚がより広がりを見せていることを意味している。以下、それぞれの下位尺度に含まれる項目の合計得点を、分析に用いた。

Table 1　死別経験による人格的発達項目の因子分析結果 (プロマックス回転後のパターン行列)

質問項目	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	共通性
第一因子：死への恐怖の克服（α ＝ .85）				
死についての考えが思い浮かんでくると、いつもそれを跳ね除けようとする。*	.85	.05	0	.75
死を非常に恐れる。*	.82	−.07	.03	.66
死について考えることを避ける。*	.71	.05	.05	.53
人が亡くなると直結して自分の死について考えてしまうので嫌だ。*	.68	−.14	.06	.45
第二因子：死への関心・死の意味（α ＝ .77）				
死とは何か、その意味を考える。	−.08	.85	−.07	.71
家族または友人と死についてよく話す。	−.02	.71	.06	.5
死について考えることは人を成長させると思う。	−.13	.61	.28	.44
自分自身の死についてよく考える。	.36	.56	−.1	.53
第三因子：自己感覚の拡大 (α ＝ .71)				
人とのつながりを大事にしている。	.02	−.33	.71	.6
他人の喜びを自分の喜びとすることができる。	.02	.21	.7	.55
私はプラス思考で物事を考えられる。	−.04	.12	.66	.46
どのような人にもその人なりのよさがあるように感じられる。	.19	.03	.45	.24
固有値	3.21	2.39	2.15	
累積寄与率	26.74	46.66	64.58	
Ⅰ	—	.17	−.01	
Ⅱ		—	.02	
Ⅲ			—	

注 . ＊は逆転項目を示す。逆転項目は得点を逆転させた後に算出した数値を示している。

2　自然観尺度の作成

まず、項目選定に際し、回答の偏る質問項目を除くため、項目ごとに尖度、歪度を指標として検討した。その結果、それぞれの項目に適度なばらつきが見られ、回答に偏りがないことが証明された。次に、5 項目に対し最尤法・斜交回転；プロマックス法による探索的因子分析を行った（Table 2）。このとき、因子数を一因子とした場合のみ不適解とならず、また質問項目の内容も一因子として十分に解釈できる範囲であったため、一因子を採用し、自然観尺度と命名した。また、項目全体の Cronbach の α 係数は .86 であり、内的整合性が確認された。この自然観項目の得点の高さは、より身近な自然を愛しむ傾向にあり、より関心が高く洞察が深いことを示す。以下、この全 5 項目の合計得点を自然観を評価する指標として用いた。

Table 2　自然観項目の因子分析結果（プロマックス回転後の因子行列）

質問項目	Ⅰ	共通性
第一因子：自然観 (α ＝ .86)		
動物（人以外）、虫、植物を愛しむ。	.86	.73
四季（季節の移り変わり）を敏感に感じる。	.81	.66
草、花、虫など小さな命に目をかけ気にする。	.76	.58
日没、日の出など自然の中に改まった気持ちを感じる。	.69	.48
自然（大地、火、水など）は人間に力を与えると思う。	.61	.37
固有値	3.24	
累積寄与率	64.81	

3　死別による人格的発達に自然観が及ぼす影響

続いて、自然観が死別による人格的発達に与える影響を検討するために、人格的発達因子（死への恐怖の克服、死への関心・死の意味、自己感覚の拡大）を従属変数とし、Step1 でコントロール変数（故人との続柄、職業、性別、年齢、信仰心、死別時からの経過年数、死別時の被験者の年齢）、Step2 で自然観を順次投入する階層的重回帰分析を行った。その際、説明変数と考えられる「職業」と「故人との続柄」を分別するため、ダミー変数を用いた。「職業」では職業 1 は有職者、職業 2 は無職者、職業 3 はパート、アルバイトなど、職業 4 は専業主婦、職業 5 は学生、職業 6 はその他とした。「故人との続柄」では故人 1 を実父母、故人 2 を配偶者、故人 3 を祖父母、故人 4 をその他家族、故人 5 をその他家族以外とした（該当するものは 1、しないものは 0 と入力）。結果を Table3 に示す。

階層的重回帰分析の結果、人格的発達の“死への恐怖の克服”と“死への関心・死の意味”においては、第 1 step で投入したコントロール変数は有意な説明力をもたず、自然観を投入した第 2 step でも有意差は見られなかった。一方、人格的発達の“自己感覚の拡大”については，コントロール変数を投入した第 1 step の説明力は有意とならなかったが，第 2 step で 14％の説明力増加が見られ、自己感覚の拡大と自然観の間に有意な正の関連（β = .438, p <.001）が示された。以上より、Step1 で説明変数をコントロールした際、人格的発達の中の“自己感覚の拡大”のみにおいて、自然観の影響があることが明らかとなった。

Table 3　人格的発達を従属変数とする階層的重回帰分析結果

	死への恐怖の克服		死への関心・死の意味		自己感覚の拡大		
独立変数	step1	step2	step1	step2	step1	step2	
コントロール変数							
故人 2	.00	.00	−.05	−.07	.09	.03	
故人 3	−.06	−.07	.10	.06	−.11	−.21	
故人 4	−.20	−.20	−.19	−.26	−.34	−.49	
故人 5	−.21	−.21	−.10	−.14	−.43	−.52	
職業 1	−.12	−.22	−.02	.00	.01	.07	
職業 2	−.02	−.02	−.01	−.01	−.09	−.09	
職業 4	.04	.05	.08	.12	−.03	.04	
職業 5	−.09	−.09	.08	.06	.06	.02	
職業 6	.11	.12	−.05	−.00	−.05	.05	
性別	−.18	−.19	.20	.05	−.28	−.61	
年齢	−.18	−.19	.22	.12	−.08	−.30	
信仰心	.06	.06	.05	.06	−.11	−.08	
経過年数	−.01	−.14	.04	.03	.05	.03	
死別時年齢	−.01	−.01	.19	.20	−.08	−.06	
自然観		.02		.19		.44	**
R^2(adjusted)	−.08	−.10	.03	.05	−.04	.10	
F	.48	.02	1.18	2.56	.72	14.31	**
⊿R^2		.00		.03		.14	

故人：2＝配偶者、3＝祖父母、4＝その他家族、5＝その他家族以外

職業：1＝有職者、2＝無職者、4＝専業主婦、5＝学生、6＝その他

性別：1＝男性、2＝女性

＊＊＝$p < .001$

※除外された変数：故人 1(実父母)、職業 3(パートなど)

V　考　察

1　死別経験による人格的発達測定尺度の再検討

質問紙調査の結果、渡邉・岡本（2005）の尺度を簡便化した 3 因子 12 項目から成る「死別による人格的発達尺度簡易版」が作成された。この人格的発達項目は、因子的妥当性と全体として一定の信頼性が認められ、簡便に死別による人格的発達を測るという尺度作成の意図を満たす尺度であると考えられる。以上より、渡邉・岡本（2005）の研究は、生や死に強い関心のある対象者に限定された調査であったが、本研究の結果より人格的発達測定尺度の簡易版は一般の対象者に使用できる尺度である可能性が示唆された。この尺度作成による利点として、今まで死別による成長について、限定された対象者でしか測定できなかったものが、一般成人に対して利用しても同様な因子が確認され、しかも、質問項目が少なく手軽に使用できることが可能と考えられる。

2　自然観尺度の作成

本研究では、1 因子 5 項目からなる「自然観尺度」を作成した。この尺度は動植物、季節、

太陽などの自然に対して関心を持ち、慈しむ気持を持つ５項目から構成されているが、結果より、内的整合性が確認され、信頼性を満足させる水準にあると考えられる。自然観についてはそれを測定する尺度はほとんど存在せず、既存の尾崎ら（2005）の尺度は、表現が難解で使用しづらい。本研究の自然観尺度は、日常の身近な自然に対する個人の態度や理解という観点から自然観を測定するものであり、答えやすく簡便で使用しやすいものと思われる。したがって、このような新しい観点より自然観尺度を作成した点は意味のある結果であると考えられる。

３　死別による人格的発達に自然観が及ぼす影響

死別による人格的発達に自然観が及ぼす影響として、人格的発達の中の“自己感覚の拡大”のみにおいて、自然観の影響があることが明らかとなった。これより、自然観得点の高い人は低い人に比べ、より成長が促されるという仮説が一部で支持された。つまり、日常において自然への愛しみや生命の尊さを自然から感じ、理解のある人は、自己受容や他者、社会へと視点を移す、死別による人格的発達の自己感覚の拡大に影響を及ぼすことが分かった。先行研究においても、自然との接触効果として、休みがちだった児童がキャンプの参加を機に元気になり、積極的に学校へ行くようになったというように、自然接触が好まれ、実際に心身の状態や行動をより良い方向に変容させたとする報告がある（尾崎，1998）。また、田中（1994）も自然と触れ合うキャンプの後、子供の表情が明るくなり、自然に自己表現が出来るようになり、対人関係の広がりと、自身に対する自信を獲得したように見えると報告している。つまり、自然とのふれあいは身体面に加え、主体の肯定的な心理的変化も生むのではないかと思われる。今回の結果を考えると、死別を経験した被験者についても例外でなく、自然観が死別による人格的発達に及ぼす影響としては、“死に対する意識の変化”ではなく、特に“自己の受容”や、他者・社会に対する視点の広がりである“自己感覚”に関して影響が見られたと考えられる。

また、死別による人格的発達である“死への恐怖の克服”、“死への関心・死の意味”には自然観の影響が見られなかった点について考察したい。近年、時代の変化に伴い、自然との関わりは減少し、特に都心部では人工が自然を圧倒しており、動物や植物の死により死を学ぶ機会が減っていることが示唆されている（小原，1997）。つまり、自然との接触の減少は、自然観の中でも特に「死」の部分に影響を及ぼし、死の経験や死を考える機会を減らしているといえる。よって、死別による人格的発達の“死への恐怖の克服”、“死への関心･死の意味”に見られる「死」の意識を問う因子には自然観による変化は見られなかったのではないかと考えられる。あるいは、「死」という問題は、自然観だけではなくデスエデュケーションや宗教といった個人の過去の経験や背景に強く影響を受けているのではないかと思われる。

本研究では、死別による人格的発達に自然観について検討したが、死別によるポジティブな変化に自然観の影響について検討した研究は筆者の知る限り他には見られない。しかし、日本人は自然との一体感や肯定視が強いとされており、考え方の根底に自然信仰が根付いている。特に、死別に関しては、無為自然に言われるような生き方、死に方を望む傾向にある。また、柏木（1997）によれば、ホスピスの末期患者の多くは、自然との接触を求めることが明らかになっているように、自然には我々を癒す力を持っている。以上より、日本人の死別による人格的発達に関して研究を行うのであれば、その意識の根底にある自然観を考慮して

検討することは重要であると考えられる。したがって、本研究において、自然観という観点から死別による人格的発達を検討した点、死別により主体の自己受容や周囲への意識変容など肯定的な心理的変化を自然観が促すことの可能性を示唆したことは意味のある結果であったと言えよう。

Ⅵ　課題と展望

本研究では、死別による人格的発達に関して、自然観の観点から調査を行ったが、死別による人格的発達という概念や定義の精緻化について十分に説明できていないことが渡邉・岡本(2005)によって指摘されている。また、本研究では、死別による人格的発達の定義に関して、渡邉・岡本（2005）の研究を引用した。よって、死別による人格的発達の概念、定義については同様に再検討が必要であろう。次に、今回作成した自然観尺度に関しては、尺度の妥当性に関しては検討を行っていない。したがって、この尺度に関しては、尺度の妥当性を含めて、検討を重ねて行く必要性があるといえる。加えて、この調査に関してはサンプリングの偏り、調査対象者の人数の少なさが問題点として挙げられる。死は長い間、タブー視されてきた歴史があり（河合・下仲・中里，1996)、死に関する研究を行う際、対象者を得ることは容易ではなく、非常に限られ、偏ったサンプリングとなってしまったことは本研究の限界でもあると考えられる。また、本研究では自然観が死別による人格的発達へ影響を及ぼすといった観点から検討を行ったが、逆に死別による人格的発達が自然観に影響を及ぼす可能性が十分に考えられる。よって、死別経験による人格的発達と自然観の因果関係についてより詳細に検討する必要があると考えられる。

Ⅶ　引用文献

Deeken, A. 1983　悲観プロセスを通じての人格成長 看護展望　**8**，881-885.

Deeken, A. 1990　死生学 第三集 技術出版　**4**，126-128.

東村奈緒美・坂口幸弘・柏木哲夫・恒藤 暁　2001　死別による遺族の人間的成長 死の臨床，**24**，69-74.

柏木哲夫　1997　死を看取る医学　ＮＨＫ出版

河合千恵子・下仲順子・中里克治　1996　老年期における死に対する態度 老年社会科学，**17**，107-116.

清藤大輔・板橋政子・岡部 健　2002　仙台近郊における「お迎え」現象の示唆するもの－在宅ホスピス実践の場から－ 緩和医療学，**4**，46.

Landsberg, P. L. 1973 Die Erfahrung des Todes. Suhrkamp Verlag.（亀井 裕･木下 喬（訳）1997　死の経験 紀伊国屋書店）

NHK 放送文化研究所（編）　2000　現代日本人の意識構造 [第五版] 日本放送出版協会.

NHK 放送文化研究所（編）　2005　現代日本人の意識構造 [第六版] 日本放送出版協会.

小原秀雄　1997　万物の死　講談社ブルーバックス

尾崎勝彦・平井 啓・恒藤 暁・藤田綾子　2005　自然観の構成と尺度化の試み 日本理科教育学会第 55 回全国大会発表論文集　223.

尾崎 裕　1998　集団キャンプに参加する　児童心理，**52**（9），138-141.

総務省統計局・統計研究所（編）　2007　第 57 回（2008 年版）日本統計年鑑 日本統計協会.

田中陽子　1994　キャンプ―自然の中で自立心と社会性を育む　児童心理　**48**（9），110-114.
丹下智香子　2004　宗教性と死に対する態度　名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要　**51**，35-49.
渡邉照美・岡本祐子　2005　死別経験による人格的発達とケア体験との関連　発達心理学研究，**16**，247-256.